

# 教化学研究の意義について

石川 教 張  
(現宗研研究主任)

## 教化学研究の今日的意義

ただいまから、第一回の教化学研究集会と名づける研究会を開催したいと思えます。本日は大変忙しい中を、ご参加いただきまして、誠にありがとうございます。

日蓮宗現代宗教学研究所(以下、現宗研と略す)としましては、これまで中央並びに地域(教区)において、教化研究会議(以下、教研会議と略す)を開いて教化活動に関する事例体験や問題点の解明、教化の内容と方策の具体化などを、種々交流検討しあってきたわけですが、日蓮聖人第七百遠忌に当たって取組んだ報恩の教化活動を発展させ、さらに遠忌以後における現代社会に対応する教化研究を推進させるため、教化事例と体験を踏まえながら、ひとつ教化の内容と方策を明らかにしてゆく「教化学」の研究が必要ではないのか、ということと、「教化学」の研究集会を提起したわけがあります。

「教化学」という言葉は、日蓮宗においては、まだ耳なれない言葉であります。その重要性と必要性に着目して、教化学研究の集いを、今回初めて試みとして開催させていただくことになったわけです。

この第一回の教化学研究会は、今まで積み重ねられてきた教研会議の成果を集約しつつ、現在取組まれている布教教化の内容を明示し、教化の体系化を図ることをめざすものです。教化に関する事例体験の交流を一步すすめて、教化の内容・課題・方策を理論的に解明し集約することによって、実践的な方向を打ち出す必要があるのではないかとすることは、現宗研の内部でつねに話しあわれてきたことであります。教研会議等においても、もつと具体的に教化の方向というものを打ち出すべきだ、というような意見が多くありましたので、現宗研としまして、この集会をまず発起したわけです。その後、立場上私が、それでは「教化学研究会」のかたちでやらなければならないということと提案し、開催にいたしました。そこで、この集会をもつた責任の一端がありますので、私のほうから、教化学研究を行なう意味について、アウトラインを簡略に発題し、それから今日の発題者の方々から、具体的な各論の内容について、提案並びに報告をいただければありがたいと思っております。

まず第一に指摘しておかなければならない点は、この「教化学研究会」を開いてゆくことが、日蓮宗の研究機関である現宗研の基本的な任務を具体化するものであるということです。ご存知のことと思いますが、日蓮宗現代宗教研究所は、宗務総長に直属する研究機関であると共に、持続的に研究を積み重ね、自立してその成果を宗門全体に提示する役割をもつ研究所という性格をもっております。具体的な任務・仕事としては、教学の現代的解明に関する研究、現代における日蓮主義の研究、現代における信行体系に関する研究、現代における教化理論及び布教方策に関する研究、さらに、教材資料の収集・保管・作成といったような任務が本来あるわけです。これらの諸内容は、今まで現宗研独自の研究調査活動や教研会議等において推進してきたわけでありますが、研究という立場において、本格的に信行および教化の理論方策を体系的にまとめてゆくということが、現宗研そのものの使命であり、それをすべての教師の協力と参加を得つつ具体化する必要があるという姿勢から、「教化学研究」というものを、ひとつの今後

の柱として実施してゆくことになったのであります。

第二は、日蓮宗が教化本位の「伝道教団」としての特質を再生確立してゆくためには、たんに行政的な措置をこざるだけでなく、教化を推進している現場の教師が教化交流を図り連帯協力しつつ、教化に積極的に取組むための基盤として、この教化研究の場を確立するという意味があります。これまで十五回にわたる中央教化研究会議を開き、また地域においても、現在九教区において、教研会議が開かれてきています。さまざまな事例体験の討議や話し合いが行なわれ、そこから教化上の問題が提起され、カリキュラム作成委員会の設置、『信行道場読本』の刊行、各種教化資料の作成交流、教化センターの開設と実動、報恩教化の実践等の成果がうまれてきています。さらに一歩を進めて、教化の事例体験研究というものを踏まえながら、教化の内容と方策をとりまとめて提示してゆくということが、今、教研会議そのものが新しく脱皮をしてゆく上において、非常に重要なことになってゆくのではないかと、う課題に应运えてゆくためには、「教化学研究」というものを、やはり教師の参加によってまとめ打ち出してゆくことが必要であろうということです。

このことは、教研会議だけでなく、宗門で実施されている護法運動や布教講習会、研修会・信行会等のさまざまな内容をも報告し集約して、教化の内容と方策とを明らかにしてゆくことも含まれます。

第三は、現宗研あるいは教研会議において、教化センターないし教化資料センターづくりというものを提示してきたことと関連しますが、現場に活かす教化内容と方向を具体化してゆく土台にしたいということです。やはり個人プレーだけではなく、チームプレーによる教化活動の推進と組織的な教化態勢をつくりあげていく点から、それを通して教材資料を交流し、活かし、しかも現代教化に対応する教材資料を作成してゆく上からも、「教化学研究」は不断に持続されることが要請されているといえます。安直な形でテクニク的に教化を考えてゆくのではなく、やはり衆

知を集めて信仰的にしかも体験的に磨かれたものを提示し、教師が現場において活かしてゆく教化内容を、「教化学」としてまとめなくてゆく必要があるのではないかと考えてあります。

第四には、これは詳しくいう必要はありませんけれども、現代のさまざまな時代状況の問題の中で、現代社会に対応する教化とは何か、ということがたえず問われているわけでありまして、都市化現象にともなう過疎・過密の問題であるとか、あるいは青少年の非行、教育問題、核家族化とそれによる意識の変容の問題、さらに核兵器や軍備の増強による核戦争の危機が深まり、再び戦争への道を歩みはじめてゆこうとする現代社会の状況、人間精神の退廃・荒廃と人間不信が深まり邪悪と迷妄が充満している末法的現実に対して、我々は如何にコミットできるような教化を提示してゆくかということが、非常に大きな問題となっているわけで、今日生きる人々の心の中に、どのように信仰のありようを示し、仏種を植えてゆくか、あるいは示してゆくか、社会と人間の状況に応じながら、日蓮宗徒として法華経信仰と日蓮聖人の示された立正安国の精神をどう活現してゆくか、そういう問題が教化の根本的なものとしてたえずあるわけです。それを単なる飾り言葉としたり、形式の上の言葉に終らせるのではなく、実際に具体的にどう展開するかという問題がいつも問われており、仏祖の要請に答えていかなければならないということがあろうかと思えます。

それは同時に、宗門に限っていうならば、七百遠忌後の布教教化はどうあるべきかという問題として考えなければならぬ。七百遠忌後何かをやらなければならないからスローガンを考えるのではなくて、こういう現代社会の状況に対応する教化を考えることによって、それが自動的に日蓮宗全体の教化の目標になってゆくというものではなければならぬと思います。そういう意味で、まだ具体的に宗門としてどういう教化をやっているのか打ち出されていない状況の中で、我々が今ここで「教化学」の問題を考えるとすることは、非常に重要な意味を持っているのではないかと

思っているのです。

第五には、「教化学」の研究内容を明らかにし、これに取組むことの重要性であります。

「教化学」の研究内容は、信行論・教化の体系化・教団論・寺院論・僧侶論・寺院婦人・寺族論・住職学・宗徒教育論・社会教化論・分野別対象別の教化方法論など、さまざまな分野にわたるのではないかと思います。すなわち、教化のために必要な内容を研究し教化にいかす学問研究を「教化学」とよび、宗学が教理の学問体系であるのに対して、これは教化の体系とその内容を意味すると考えられます。教研会議で語りあつた体験内容をふくめて、信仰・教化の内容と方法について、教化活動の土台となり、教化体験からまとめられた教化の理念的内容を発表する場をもつことは、大切なことであろうと思います。さきにあげた研究内容をやや具体的に羅列してみると、「教化学」のテーマについては、例えば、次のようなものがあげられるのではないかと。

法話と内容としかたについての研究・年中行事を教化にいかす研究・信行会のすすめ方の研究・子供会の開き方の研究・法具に関する研究・唱題行実修についての研究・法要式声明についての研究・法華経ご遺文の説き方の研究・修法祈禱についての研究・法話読教の内容とその仕方の研究・ハガキ伝道についての研究・視聴覚伝道についての研究・信行会子供会などの研究・カウンセリングについての研究・寺門運営についての研究・社会問題と結びついた教化の研究・寺報の発行と活かし方の研究・寺族のあり方についての研究・檀信徒の悩みをうけとめ解決していくための研究・家庭における信仰生活の内容とすすめ方についての研究・教化資料の活用についての研究・音楽法要の活かし方の研究。

これらは思いついたままをあげたもので、もつと他にたくさんあると思うし、このテーマからさらにこまかいテーマもなりたちうると考えられます。

「教化学研究」は、曹洞宗では盛んに取組まれており、キリスト教などにおいては、伝道学を中心に体系的な理論あるいは方策がまとめられているという状況もあります。全体的には、教化の理論方策の研究については、日蓮宗は立ち後れているというふうに見えるのではないかと思うわけです。しかし、『法華経』はすべての人を仏道に入らしめる教化を説いているのであり、日蓮聖人一代の行実も、『法華経』の仏道に導き入れることによって、社会と人間の救済を実現した教化実践の足跡であったといえます。『法華経』と日蓮聖人の教化弘通の内容・方策というものを考えますと、「夫れ一切衆生の尊敬すべき物三つあり。所謂主師親これなり。又習学すべき物三つあり、儒・外・内これなり」(『開目抄』)、「夫れ仏法を学せん法は必ず先ず時をならうべし」(『撰時抄』)と日蓮聖人も仰せられているように、そこに、今日我々がいう「教化学」というものがすでに内包されていて実践されていることになるのではないかと考えることができると思われれます。

「教化学研究」の意味というのは、以上述べた五点をまず基礎にして、今後、研究をすすめて、その内容を整理し体系化しつつ、具体的に提示してゆくことにあるのではないかと考えております。

## 五義の心得とその現代化

そもそも第五の点に関連して言いますならば、『法華経』と日蓮聖人の教化弘通の内容を、まず領解し習学せねばならないと思います。『法華経』の中に、法説・譬喩説・因縁説というような一つのパターンというものが示されているのはいうまでもないわけですが、『法華経』そのものの中では、教主釈尊が菩薩のため、一切衆生のために法を説く、あるいは演説するということが、しばしば説かれているわけです。教主釈尊が、苦の衆生を度脱するために、一仏乗に帰せしめるために、また一切衆生を仏道に導くために、法を説くのだと語っておられるのは、すでにご存知の通り

であります。「教化」という言葉も、『法華經』には数多く示されており、その最もポピュラーな文字は、いうまでもなく、「常に法を説いて無数億の衆生を教化して仏道に入らしむ」という「自我憍」の第一節であります。常に法を説くという説法の行為、その法を説くという行為そのものが、一切衆生を教化するものとして展開されなければならぬ。説法とか弘經・弘通というのは、そういう『法華經』の教説というものを教え説いてひろめてゆくことを意味するわけですが、法を説くという行為によって、教えのもとに、苦患し迷妄に包まれた人々の精神を仏の教えによって救い、苦しみをとり除き安心を与えてゆく方向に転換させ、さらに濁世の社会そのものを清浄に変えて、社会と人間を覚醒してゆく、そういう信仰の力とエネルギーを持つのが教化の本来の意味であろう、と考えられるわけです。(拙稿「教化と報恩—教化論についての覚書」現代宗教研究第十一号所収)。

日蓮聖人の言葉に従えば、心田に仏種を植えてゆく、仏性を開発し迷妄の人間の心というものを蘇生させてゆく、そういう妙法蓮華經の功徳を積み分け与えてゆくところに、教化の本来的意義があるのではないかと思うのです。

ですから、そう考えますと、私などは、教化というのは、かなり安直に考えていましたけれども、法を説くテクニクであるとか、手段であるとかいうような次元だけに本来の教化があるのではなく、法を説くということによって仏の道に人を導いてゆく、謗法の心を転改させて法華經の仏道に引導させてゆくという、信仰的実践的な「成仏」実現の営みというところに、教化があるわけで、日蓮聖人が『立正安国論』の中で、「汝、信仰の寸心を改めて実乘の一善に帰せよ」といわれたように、不信謗法の人間の心を、「改めよ」とさし示す実践によって、正法に帰順せしめてゆくという信仰実践のうちに、教化というものがあるのではないかというように思うわけです。従って、邪惡謗国の社会を変え、その謗法の社会を法華經の仏土に転換させてゆくこと、謗法の人間の心を正法へと変革せしめるという覚醒の精神、開発蘇生の意味をもつ「妙法」の活現こそ、教化の本質的な意味があるのではないかというように考え

たい。『法華経』を拝読し、日蓮聖人のご遺文を拝読すると、このように教化という意味を受けとることができないのではないかと思います。

従つて、教化というのは、釈迦仏・法華経であり、法華経・題目であることはいうまでもないわけですが、その唱題と釈迦仏・法華経の精神を説くことによつて、仏の道に人々を導いてゆくことであり、心田に仏種を植えてゆく、という下種結縁をさしています。そうすると、これまで仏の教えを信じておらず、また誇っている人の心を轉身させて仏道に導いてゆく、廻向の姿やそういう精神の転心を図り、不信謗法の人の中に分け入つて正法を説きあかし、『法華経』による教化によつて、社会と人間への「救い」というものをもたらすものでなければ、本当の教化とはいえないと思われまふ。「我弟子等心みに法華経のごとく身命をおしまし修業して、此度仏法を心みよ」(『撰時抄』)、「行学の二道をはじめ候べし。行学たへなば仏法はあるべからず。我もいたし人をも教化候へ。行学は信心よりをこるべく候」(『諸法実相抄』)の教示は、『法華経』への信の教化に命を献げた日蓮聖人の身証体験を通して、門下における教化の根本姿勢として語られたものといえます。こうした教化のあり方を、いかに学問的な体系として、どのような柱で、いかに作りあげてゆくのかというのが、実はこれから取組まなければならない問題ではないかと思ひます。

宗学が日蓮聖人の教義・教理の信仰的な体系であるとすれば、教化のための内容や方策を実践的・学問的に体系化するということが、「教化学」というものの一応の意味ではないか、と考えることができようかと思ひます。

文末資料は、私自身の考えてることをいささかまとめたものです(資料1)。日蓮聖人は、ご存知のように、五義を「弘法の用心」として提示され、教・機・時・国・序、後には師の自覚を示されているわけです。教とは何か、機とは何か、それから時・国・序の教義的体系というものを提示し解き明かしてゆく、という一つの宗学的なアプローチのしかたがあるのですけれど、「教化学」の場合においては、どういうアプローチの仕方ができるだろうかというこ



とを、最近考えておりました、これは不十分で現実化しすぎているかもしれません、資料1は結論的なことを書いてみたものです。

五義のうち、ご存知の通り、教とは単なる経典ではなく、『法華経』こそ一切諸経の王であると知ることが、教を知るものであるという一つの主体的な自覚と結論に到達されているわけですが、「教化学」の場合、一切経の王である『法華経』の観点を踏まえて、教説というものを、どのように今日的な次元で活現してゆくべきなのか、ということが問われているのではないかと思います。

機の場合においては、これは未法の機であることはいうまでもないことですが、人々のおかれている状況や意識の実態をとらえ、人間の人格形成、信仰を継承すべき法の担い手の育成という形で、一つの教えのもとに信仰を増進せしめ、信仰を担ってゆく人材というものを育成してゆく活動の内容と方策とかいうものが、自覚的に考えられてゆかなければならないのではないかと。

教と共に最も大切な時の認識の問題は、未法の時であると同時に、日蓮聖人にしたがえば、選ばれたときであり、時を選ぶ歴史的な自覚に立った信仰教化でもあるわけですが、その時代的な問題状況と離れたところで教化を考えるのではなくて、現実の問題状況ときり結びそこに参入しつつ、どう教化の内容を打ち出してゆくか、そして時代を背負ってゆく、歴史を築いてゆくような、教化の内容のもとに、多くの信徒というものを生み出し結果してゆく信仰教育ということが必要ではないかということです。

国の問題は、ここでは、教団ということを一応考えております。実は、全部五つの教だと、私はいいなかったのが、日蓮聖人の五義判の基本的な点であろうと思うのですけれども、国土全体と地域社会に対して、開かれた信

仰教化がなされなければならないし、国家社会の誤ちを正すような信仰姿勢と実践でなければならない。あるいは、信仰教化の実践のもとに協同し異体同心する、いわば信仰共同体として社会の中に形成されてゆくことでなければならぬ。一宗一派の中の日蓮宗という現実がありますけれども、信仰的な精神からいきますと、教主積尊の眞の精神を継承し、それに直参し、外相承の観点からいけば、积尊―天台―伝教―日蓮―わたし、というように継承されてゆかなければならないというのが本来なわけです。現実はずんぜん違つて、現状の中では、一宗一派の日蓮宗となつていますけれども、本来はそういう意味の日蓮宗でなければならぬということからいきますと、やはり日蓮一門と日蓮聖人がいわれた、その信仰共同体というものを作りあげてゆくべきであるうと思ひます。

率直に申し上げますと、日蓮聖人がおられたときの天台宗は、密教化し儀式化し、そして地位身分の高いものが権力をふるう集団であり、これが日蓮聖人の指摘された「古き天台宗」の姿であつたと思ひます。日蓮聖人は、その天台宗の僧侶として出発しながら、やがて本朝沙門日蓮、仏使日蓮という自覚にたれた。そして現実的には、「日蓮が弟子檀那」という日蓮一門を創造し形成してゆく道を歩まれた。「仏経と行者と檀那と三事相応して一事を成ぜん」(『問註得意抄』)、「よき師とよき檀那とよき法と、此の三つ寄り合ひて祈を成就し、国土の災難をも払ふべき者なり」(『法華初心成仏抄』)という言葉は、こうした日蓮一門のあり方を明示しているものといえます。ここに、教団が形成されるために必要なモメントが語られており、教団論の基点もまた提示されていると考えられます。その足跡を考えると、私たちは、古き日蓮宗の中で、如何に日蓮一門を作りあげてゆくのかという一つの課題が、日蓮聖人から問われて来ているのではないかと思ひます。

それから序、これは、『法華経』の弘通の次第順序であり、後には師の自覚にたつて『法華経』を弘めてゆくことになつてゆくわけです。いわゆる教師という場合の教師とは、本来教えの師でなければならぬというのが、あるべき

姿でありますけれども、なかなか教・機・時・国というものを踏まえて教を弘めてゆく形になってないことを、私自身深く反省するわけですが、やはり行学二道を歩み、お互いの教化のための交流連帯をはかりながら、教化者の立場で考えてゆかなければならない、ということであろうと思うのです。

五義判は、ご存知の通り、弘法の用心として、日蓮聖人は提示されたわけですが、このことは、「弘法」が論理だけですまずに、それが「身証」されるのが大切であり、「行」として展開されなければならない。「弘法の用心」とは、換言すれば、教を弘めるための心得ですから、教化を行じてゆくために、とるべき教化者の姿勢と認識すべき内容が、今日的にいえば、教説・教育・教化・教団・教師ではないかと考えたわけです。

そういうことから考えますと、『法華経』とご遺文の習字とか、信・行・学のための道場であるとか、いろいろな信仰運動の推進、「教化学」の研究、社会平和の実践、日蓮一門の形成、教研会議や教化センター作り、といったような具体的課題が、五義判を歴史化・実践化する中で考えられてゆくのではないかと。

言い換えるならば、一体、誰が、何を、どこで、どのように、そして我々はなぜ取組まなければならないのかを明確化してゆくべきではないかということです。

また、次に、『曾谷入道殿許御書』の一文を重視したいと思います。

此の大法を弘通せしむる法は、必ず一代の聖教を安置し、八宗の章疏を習学すべし。然れば則ち予が所持の聖教多々之れ有りき。然りと雖も両度の御勘気、衆度の大難の時、或は一卷二巻散失し、或は一字二字脱落し、或は魚魯の誤謬あり、或は一部二部損朽す。若し黙止して過ぎなば一期の後、弟子等定んで謬乱出来の基なり。爰を以て愚身老耄已前にこれを糺調せんと欲す。而るに風聞の如くんば、貴辺並に太田金吾殿の越中の御所領の内並に近辺の寺々に数多の聖教あり等云々。兩人共に大壇（檀）那たり。所願を成ぜしめたまえ。

この一節に拠って、本書は『聖教御尋事』（以下この呼称を掲げる）とも呼称され、聖教に関する日蓮聖人の内容と姿勢を集約的に表現しています。内容に沿っていえば、「聖教の安置・習学・糺調・収集について」というべき一節で、日蓮聖人はここに次の三点を明示しています。第一に、大法弘通の法として聖教の安置と八宗章疏の習学を指示しています。大法弘通という至上目的を実現するモメントとして、聖教の安置と習学の実践についての重要な意義を強調したものです。第二に、日蓮聖人自ら蔵教の糺明調査を実施する積極的意図を示しています。大法弘通の基礎要件として多数の聖教を所持していたこと、迫害によって聖教の一部が散失、脱落、誤写の放置、損朽を余儀なくされたこと、弟子等の「謬乱」と聖教の死蔵化を防止するためにも、聖教の糺調は黙視しえぬ不可欠な努力として、これに取組む覚悟をひききしたものです。第三には、曾谷・太田両名に越中の所領及び近辺の寺々に所蔵される聖教の収集を依頼する。そして、「使者に此書を持たしめ早々北国に差し遣わし、金吾殿の返報を取りて速々是非を聞かしめよ」と緊急に収集すべく具体的指示を行なっています。

これらの聖教に関する指示と依頼は、師檀和合による聖教活動への助力を要請したものです。それは、仏の金言を修行し、大法弘通を実現する日蓮聖人自らの「所願」としてなされたという重要な意味もっています。「今兩人微力を励まし、予が願に力を副へ、仏の金言を試みよ」という言葉からも、聖教に関する聖人の並々ならぬ決意をうかがい知ることができると思います。

こうした聖教の安置・習学・蔵教・筆写・保管・調査・収集などの総体は、今日的にいえば、「教化学」の研究と教化センターの設置ということを、日蓮聖人がいわれている一文であると思われる。

教化にとつての基礎となる文献資料を、日蓮聖人は自らの「願」として安置し、その収集に取組んでいたことがわかります。日蓮聖人は、仏教の文献だけでなく、『貞観政要』をはじめとする外典の書まで、あらゆるものを収集され

借覽されている。そして真言宗批判の場合においては、真言宗関係の書物をも自ら手にされて、それにもとづいて破折されているのです。

また、次の資料(資料2)は、日蓮聖人が身延山に入られたときの状況にもとづいて作ったものです。ご存知の通り、六老僧を中心とする門下の弟子檀越に対する一つの教導関係というものを、日蓮聖人はもたれていた。北陸グループは、豊後房などを中心とする阿仏房などへの教化、また下総・鎌倉・安房・駿河といったような地域的な教化集団が形成されています。今日において、それが教区となるのか、もつと自覚的な教化者の教化組織や教化集団としての教団の地域的形成であるのか、ということが考えられていかなければなりませんけれども、日蓮聖人は、大師講を開いたり、法門の指示とか、情報の提示・交流とか、それから先程の教化資料の収集の指示であるとか、というようなことをしばしば展開しておられます。

そういう点から、日蓮聖人の示された内容を、今日的にいえば、教化センターづくり、教化の組織集団化というのはこういう形ではないか、と私なりに思うわけです。今日、私たちは、日蓮聖人の示されたものを、やはり三十人五十人百人、さらにはすべての僧侶が集まって、日蓮聖人の日蓮宗になるという教化のための教団形成をめざして、教化活動の展開をはかってゆくことが必要ではないかと思えます。

全くアウトライン的なものですが、これらの点は、「教化学」の研究がいかに一大事であるかということをお願いするために述べただけですので、よりくわしく「教化論」としてまとめられてゆく方向を提示することにとどめ、私の発題とします。

(注)この小文は、第一回教化化学研究集会における発題を中心に若干加筆修正してまとめたものである。テープをおこしてくださった片野博義研究員に心から感謝の意を表する次第である。

## 七百遠忌後の教化活動と研究の概要計画

(石川教張試案)

一、布教の目録 教務部成案の布教方針を具体化する。二十年後の立教開宗を目標に「第二の立教開宗」をめざす。

- (1) 信仰をくらしにいかす護法運動・統一信仰の実施
  - (2) 立正安国の教えを社会にひろめる社会教化の実施
  - (3) 一カ寺二十世帯の檀信徒づくりの達成―十万世帯宗徒拡大の実現
  - (4) 宗徒意識の高揚と宗徒総弘通
  - (5) 教化組織の拡充強化
- 二、布教内容の趣旨 宗徒総弘通をめざす護法運動―「内に合掌礼拝 外に立正安国の浄行」を推進していこう。
- 三、スローガン 合掌で拝みあう心を お題目で社会浄化を
- 四、布教内容の綱要

- ① お題目の心と功德、法華経・ご遺文を学し、くらしの中にかす(教)。
  - (イ) 唱題修行を肝要とする統一信仰の全国的実施
  - (ロ) 法華経・日蓮聖人習学の集いの開催―拝読要綱・テキストの作成・『立正安国論』の一般向拝読内容の啓蒙
- ② 信仰の担い手を育成し、信仰を相続弘通していくための宗徒教育を行う(機)。

- (イ) 僧風林(少年・青年)の開催(教区別)、布教研修所・信行道場の充実
  - (ロ) 檀信徒修道場の開催(教区別)
  - (ハ) 『信行必携』(檀信徒向)、仮称「日蓮宗信仰読本」(未信徒向)の配布と活用による統一信行の実施
  - (ニ) 信行会・婦人会・老人会・子供会の充実
  - (ホ) 一カ寺一信徒青年会の結成、全国信徒青年会の支援育成
- ③ 現代社会における時代状況を解説し、人々の苦悩や要望にこたえ、生きる力を与える教化活動を推進する(時・国)。
- (イ) 都市化現象・核家族化・教育の荒廃など親と子・教師と生徒・人と人の断絶に対し、「縁」の絆を強め、但行礼拝の精神による人間尊重を説きあかす護法運動の徹底をはかる。
  - (ロ) 「仏壇・墓参をする」(七割)、「信仰心は必要」(七割)、「宗教を信じている」(日本人の三分の一)、「入信の動機は三割が家庭」(NHK宗教意識調査)等の現実に対応する家庭信仰生活と先祖供養を核とする信仰の増進をはかるため(合掌で拝みあう心)の布教とその実施。
  - (ハ) 立正安国の浄行にとりくむ。「他人に無関心」「物質主義的」への批判(前掲調査)、エゴイズムの風潮・死への無関心・非行と暴力化・環境破壊・差別・核兵器の増強拡散による核戦争の脅威等「病んでいる人の社会と人間の心」を清浄にして病いをなおして人を救う布教を行う。合掌礼拝と仏国土の清浄化・清浄の行による仏道と仏身の成就が、『法華経』と日蓮聖人の教えの肝心であることを説き示す仏事の厳修・法話の実施・社会及び地域における

教化の実行。

(二) 世界立正平和運動の活性化

(ホ) (イ)～(ハ)についての資料・テキストの作成・配布

④ 教師の行学研鑽・教化交流と教化組織の充実を図り、宗徒の育成増加をめざす行学道場・

護法運動を推進する（序・師）。

(イ) 教師対象の統一・行学（専修）道場の開催

(ロ) 教化研究会議・布教講習会の強化

(ハ) 機構改革の理念にもとづく管理部門と布教部門の明確化

宗務院の布教部門（総合企画・教務・護法伝道・現宗研）と教区（広域布教実施機関）・管区

（護法担当事務長・布教・修法・社教・声明師・青年会・教研運営委員ないし教化センター）布教

部門とのタテとヨコの連携を図る。

(ニ) 特別（派）布教の実施、護法運動講師団の結成

(ホ) 布教連絡会議の開催（構成—宗務院四部門・管区七部門）、または教区連絡会議の充実（組

織図参照）

(ハ) 管区内各布教機関のヨコの連携・教区布教の実動・教材資料の収集作成にとりくむ教化

センターの管区内設置

(ト) 檀信徒教化事例集・手引書の作成と檀信徒増加目標の達成

(フ) 日蓮宗新聞の購読者拡大と出版活動の推進



五、布教年次計画の概要

(リ) 護法大会の全国的開催―宗徒意識の高揚・信行会・護持会の充実と宗徒総弘通をめざして

第一期 趣旨徹底の年 (58・4～59・3)

○布教方針・要綱の趣旨徹底 ○合掌礼拝・立正安国の教えの行学による周知徹底 ○教材資料・テキスト作成 ○伝道者布教の実施

第二期 合掌の年 (59・4～60・3)

○「合掌で拝みあう心」の実施 教化組織の充実と実動 ○統一信行の実施 ○祖廟輪番奉仕団参の実施 ○宗徒育成の活動 僧風材・檀信徒研修道場・特派布教の全国的実施

第三期 教線拡張の年 (60・4～61・3)

○「お題目でいのちを大切に」の実施 ○信行会活動等による檀信徒づくりの拡充 ○管区護法大学の開催 ○団地布教・未開教地布教の実施―未開教地への新寺・布教所の建立

第四期 社会浄化実践の年 (62・4～63・3)

○社会教化・地域教化・家庭の信行増進の実施 ○立正安国の精神の研鑽 ○立正平和の推進 ○教区護法大会の開催

第五期 宗徒総決起・総弘通の年 (64・4～65・3)

○全国宗徒護法大会の開催  
○宗徒輪番奉仕総団参の実施  
○宗徒唱題行の実施等宗徒行学道場の全国的開設  
○「お題目でいのちを大切に 合掌で拝みあう心を」の精神のもとに一人の宗徒が五人の檀信徒・宗徒を入信させる入信活動の推進  
○檀信徒協会の再編強化  
○信徒青年会の拡充

